

医的診査（原文 23 ページ）

医的診査は行なわれなかった。それは前の記述から「申込者は理事達の前に出頭することが期待された」ということが導かれることからわかる。

それができない場合、代理人 (Equitable のスタッフの一人が代理人になることもあった) が代理で出頭したが、その場合は本人が出頭しないことのために特別保険料が上乘せされた。このような理事達による申込人の直接査定方式は、見たこともない申込人を医的報告書だけで判断することに比べれば多くの利点があるが、Equitable にはさらに2つの追加的な有利な条件があり、見かけで騙されやすいケースについて、リスクが潜り込むのを防いでいた。

1. William Morgan. F.R.S.は、1774 年に assistant actuary になり、1775 年 2 月からアクチュアリーになり、1830 年 12 月に引退するまで 56 年間にわたってその職にあったが、彼自身有資格者の医師であり Guy's 病院での有資格者であった。
2. 理事を改選するための会員総会の第1回目は、開業から 20 ヶ月後の 1764 年 5 月に開催された。そのため 50 回目の改選は 1813 年の 5 月に行なわれた。(これにより 1938 年(注:この本が書かれた直後)の改選は 175 回目ということになるが、1762 年の創業ということで第 176 回総会と呼ばれている。一方それ以外の追加的な総会は四半期決算を確認するために3ヵ月ごとに開かれていたので、その回数は 176 よりはるかに大きい)。

その 50 回目の選挙までの半世紀の期間を見ると、Equitable の理事会に内科医あるいは外科医あるいは薬剤師が一人もいなかったような事は一度もなかった。(内科医 (physician) というのは、元々は病気についてアドバイスする人間を意味していて、薬剤師 (apothecary) は自分の薬で実際に治療する人のことを言っていた。でもこれは我々に関する限り歴史以前の話ではない)。

最初の 50 年間の理事会には平均して2人以上の内科医あるいは外科医である理事がおり、1774 年～1775 年と 1790 年～91 年の2年間には理事の4分の1以上、すなわち 15 人中4人の内科医ないし外科医がいた。そしてその人達は殆ど皆、有名な人だった。

Harvey の演説家だったり Gulstone の講義をする人だったり、ロンドン病院・聖トマス病院・Guy's 病院・聖 George 病院の内科医だったり、医学の教科書の著者だったり、学生を教える人だったりした。

コメント (10)

契約の申込をするのに、本人が理事会に出席(出頭)して理事さん達の前で自分が健康だと証明(証言)するというのは、保険に入る方も大変だし、それを確認する理事さん達も大変ですね。

申込書の内容を読み上げて、自分の名前や生年月日を言い、申込書の内容に間違いがないことを「誓います」なんていう手続きをしていると、それなりに時間がかかります。1時間に5人こなせたとして6時間で30人。1年間 50 週としてせいぜい 1,500 人。実際にはこれよりはるかに少ない数だったんでしょうね。Equitable はどちらかといえば高額契約が多いので収支的にこれで何とかなるんでしょうが、契約件数はなかなか増えそうもありませんね。

前の「生命保険の生まれた場所」の最後の所では、最初の6回の定例理事会で「27 件の終身保険が引受けられた」となっています。これだと1回あたりせいぜい5件ということになります。

さらに既に述べた(注:「生命保険のはじまり」の頭の所で、Equitable の最初の会長として登場しています)Dr. Gowin Knight は外科について(磁気についても)本を書いたが、そのほか最初の理事会には低地三国(ベネルクス三国)にいた Duke of Cumberland の陸軍の医師だった、Sir John Baptist Silvester, M.D., F.R.S.や、陸軍の医師として指名されていた Hon. Coote Molesworth M.D., F.R.S.(最初の Molesworth 伯爵の息子)もいた。

Equitable の vice-president に何度もなった二人のうちの一の Thomas Manningham, M.D.は Jermyn 大通りに素敵な診療所を持っていたし、William Osborn, M.D.は外科医をやめて、Store 大通りの産院で産科医となり、後に Kent に屋敷を買って引退するまで産科の器具を改良し、1,200 人余もの産科医・助産婦に講義し、教育した。

Hugh Smith, M.D.は慈善家で、1780 年頃に Great Tower 大通りの一般診療所をやめて west end に近い Blackfriars の New Bridge 大通りのコンサルタント診療所に移り、市の助役となった。

College of Physicians の fellow であった聖 James 病院の James Hervey M.D.は、国立ワクチン施設の初代医局員だった。Dr. William Saunders, F.R.C.P., F.R.S.は肝臓の研究を進め、王立 Medical & Chirurgical Society の初代の会長となった。John Clarke, M.D.はロンドンの産科病院をナイトに叙せられた彼の兄弟に譲り、その後女性と子供の病気の専門家となり、Laryngismus Stridulus の正しい処方方始めて作った。

Mayfair の Dr. C.R. Pemberton, F.R.C.P., F.R.S.は Prince of Wales の、そして Duke of Cumberland の、そしてその後王の特別医師(Physician-Extraordinary)となった。

コメント (11)

このあたり、お医者さんの話はなんとも往生しました。多分イギリスでは皆高名なお医者さんなんですが、250 年前のイギリスの医療の事情なんて全くわかりませんから、このあたりの訳はあまり自信がありません。ただし「産科」というのがかなり重要だったようなことはわかります。

また人の名前のあとに几帳面に肩書きが付いています。これはいかにもイギリスらしい丁寧さです。M.D.はお医者さんの Medical Doctor、F.R.S は Fellow of Royal Society で、Royal Society(王立協会)というのは、この会員(Fellow)になると一流の学者として認められたという位の由緒正しい会で、有名な人は皆この F.R.S.になっています。

Equitable の生みの親である James Dodson も数学者として有名になりいろいろ本を書いたりして、50 歳を過ぎてようやくこの F.R.S.になったのを機に自分もここまで出世したんだから生命保険に入ろうとして、後に出てくる Amicable Society に加入を申し込んだところ年齢オーバーで(James Dodson はその時 54 歳か何かで Amicable Society の加入年齢は上限が 45 歳までだったようです)加入できず、そこで一念発起、年齢が高くても加入できる保険会社を作ろうとして Equitable ができたという話になっています。

医師のスタッフが採用されたのは 100 年後より4年だけ前の、96 年経った後の 1858 年だった。このように遅くなったのは、Equitable の会員(契約者)自体が原因であり、反動的な理事会のせいではない。

既にその 82 年前、1776 年 4 月 2 日に招集された理事会で、

『理事会は健康状態の悪い人を加入させてしまうリスクに Equitable がさらされていることを考慮し、また会長が Dr. Price から受取ったそのことについての手紙について理事会に報告したので、その結果、理事会は全員一致で次のように決議した。すなわち、

信用できる医師を理事会のアシスタントとして採用し、毎週の定例理事会に出席させ、被保険者の健康状態に関する意見について理事を補助し、それに関する環境その他の調査をし、そ

の結果を理事会に報告させることは Equitable の安全とそれを永久に確立するために非常に貢献することになるだろう。

そしてそのために理事会はそのような社員を採用し、年 100 ギニー(105 ポンド)を超えない報酬を与える権限を与えられることが望ましい』

翌月選任された 1776-7 年の理事会は、このような採用は Equitable の繁栄のために貢献するだろうと、その決議を 1776 年 8 月 21 日に開かれた招集された理事会で支持した。しかし 1776 年 10 月 3 日の会員総会において「その決議に疑問が提示され、それは否決された」。今日では生命保険会社は医的審査を次第に少なくする方向に動いている。

コメント (12)

この、Equitable のスタッフとして医師が採用されるまで 100 年もかかったというのも面白いですね。しかも理事会ではその必要性を認めて会員総会に提案しているにもかかわらず、総会で否決されてしまって採用できなかったなどというのは、総会がシャンシャン総会ではなかったということですね。

日本では相互会社は社員総代会が会社の経営者の言いなりで何の役にも立たず、ガバナンスが成立しないから株式会社の方が良いんだなんていう議論がもっぱらですが、最初の生命保険相互会社の総会は、なかなか強かったんですね。

II (原文 27 ページ)

話を続ける前にまずは方向を定め、環境に慣れるようにしよう。

我々が考えているのは 1762 年 9 月に始まる時期、すなわち Master of Bellantrae が決闘で傷ついた 5 年半後、彼が兄弟の仇討ちに戻る 1 年半前のことだ。イギリスはまだその後、アメリカ合衆国となったアメリカ植民地を失っておらず、英国の誰も聖職者 Richard Price, D.D. ほど熱心にその独立のために働いた者はいなかった。彼は後に 1780 年に Equitable が使うために、かの有名な Northampton 死亡表を作成した。また最初はある意味で(彼の若い甥である William Morgan が本格的に仕事をするようになるまで) Equitable の consulting actuary であった。

フランスはまだ王国だった。とはいえ圧制による騒乱のために沸騰していた。そして Dr. Price はその革命に関しても強い闘士であった。とはいえ彼が長生きしてその革命の残虐性を聞いたとしたら、その革命を支持することをやめただろうが。それは我々の世界とは全く違った世界だった。

autres temps, autres moeurs (時代が違えば習慣も異なる)

その時代を探検家する者にとってまず最初に印象的なのは、その時代の圧倒的な手書きの多さだ。我々のタイプライターの時代にカリグラフィー(英語の習字)はもはや失われた技術のようなものだ。アダム・スミスはまだ「国富論」を出版していない。分業も今ほど進んでいない。

そのため、ある男が帽子屋であり同時に株式ブローカーであるという現実のケースであっても、驚くことではない。あるいは会社の最初の副会長の一人であり後に会長になった、Sir Richard Glyn が、Hatton garden の塩・穀物商をやめて Lombard 大通りに銀行業の Glyn, Mills & Company を始めたことも驚くことではない。国の発展は Herbert Spencer の言葉を借りれば「限定されない、から限定された、への進歩」ということができる。我々は祖先より柔軟ではない。

また今日では男の子に Abednego, Heretage, Patience, Woollball などという洗礼名を、女の子に Tryphena などという洗礼名をつけることは普通行なわれない。

姓については我々は同じ人がある時は Fox といい、別の時には ffox といってみたり、ある時は f Fleming、別の時は Fleming と言ってみたりはしない。あるいは同じ教区がある時は聖 Faith、別の時は聖 ffaith などと言ったりはしない。支持者 (upholders) が upholsterers に変形したり、accountants が accountants になっただけだったので、近い将来果物商 (fruiterer) が省略されて fruiter になるかも知れないと思われた。しかし理事の一人であり、上流階級の一人として Grosvenor スクエアに住み、Court of Common Pleas の prothonotaries の一人と言われた Mr. Robert Ray の職業と同様なものは今日では何だろう。

Niepce と Daguerre が写真に成功したのは 19 世紀になってからだが、幸いなことに昔の理事やパイオニア達の版画や油絵の肖像画は多数残っている。彫刻もある。ある人には単に「Mr.」となっているのに、ある人には「esquire」という敬称をわざわざつけている几帳面さは微笑ましい。

申込人が会社名を言わずに単に clerk (事務員) と表示されている時は、彼は疑いもなく聖職者・牧師すなわち教会等の事務職だ。掃除夫を名乗る人が 4 桁の金額 (1,000 ポンドの桁の保険金額) の契約を申し込んでいるのを発見して驚くかも知れないが、少し考えれば彼はそれらの人を雇って働かせている人で、その雇った人にさせている仕事を彼の職業欄に記入しているということがすぐわかる。

昔流の心配りから年配の独身女性には“Mrs.”というタイトルをつけている。そのほかにも多くの古風なやり方がみつかると。たとえば「この前の 6 月 21 日の、この前の招集された理事会の議事録」などという表現だ。しかし別に難しいことではない。2 世紀弱という時間の違いは大きなものではない。Chaucer は言語が理解できなくなるほど変化するのには千年かかると言っている。

“Ye knowe eek that in forme of speche is chaunge with-inne a thousand yeer”

500 年後でもちょっと練習すればすぐわかるようになる。

コメント (13)

Equitable がスタートしたのが 1762 年、アダムスミスの「国富論」が出版されたのが 1776 年、アメリカの独立戦争は始まったのが 1775 年、終わったのが 1783 年。フランス革命は 1789 年～1799 年。そのあとを引継ぐのがナポレオンで、ナポレオンがヨーロッパ中を占領して最終的にイギリスに負けセントヘレナに流されたのが 1815 年です。

ということで、この時代のことを知るのにアダムスミスの「国富論」は非常に参考になります。本を書くというのは、その少し前の時代を前提に書くわけですから、それがちょうど Equitable がスタートした頃だということになります。

産業革命は始まりの兆しが見えつつあったというくらいですし、いろんな職業ができ始めていたとはいっても、職業の分化や分業がそれほど進んでいたというわけでもないといった、面白い時代です。

そのあたり原文ではちょっと垣間見えるくらいですが、国富論を読むといろいろ面白い話に出くわします。

カレンダーの変更（原文 30 ページ）

コメント（14）

生命保険では保険料を加入時の年齢で決めることから、年齢の計算が非常に重要になります。年齢を決めるには誕生日から加入日までの年数を計算するので、誕生日と加入日の記述の仕方が重要になります。そのためどのような暦を使って誕生日や加入日を記載するか、年の数え方はどのようにするかというのが重要になります。

イギリスではユリウス暦からグレゴリウス暦（これは今日本でも普通に使われている暦と同じものです）への移行を 1752 年に行なっています。すなわち Equitable の初期の加入者の殆どは誕生日はユリウス暦で、加入日はグレゴリウス暦で数えているということです。

さらにその上、イギリスでは年の初めと終わりについても様々な決まりがあり、とても厄介です（日本では大昔からどんな暦を使っても、1年は正月元旦に始まって 12 月末日で終わると決まっているので分かりやすいのですが、イギリスではそうではないようです）。

で、暦については結構面倒くさくて、その一方非常に興味深い面白い話がいくつもあるので、それについては別途まとめて解説します。

18 世紀の前半の頃には January から December までの 1 年の最初の 12 週間のうちの誕生日は議事録には“exeunte anno”（去り行く年）とか“ineunte anno”（来たりつつある年）という注釈が付いている。あるいは歴史の本や事典などでは良く使われているように 1730/1 などというように、二重の年数を使う方法が取られた。たとえば Edward-Rowe Mores の場合、彼が学んだ Merchant Taylors' School の記録には、毎学年ごとに 1730 年 January 13 日生まれとなっている。彼が死んだのは 1778 年 November 28 日だが、その時彼は 48 歳になっていなかった。なぜなら彼の誕生日は“exeunte anno”であったからで、“ineunte anno”では 1731 年 January 13 日となるからだ。

こうなった理由は現代的な生命保険が生まれた 10 年前、すなわち 1752 年はカレンダーの二重の改正が行なわれたからだ。

- (a) 昔の方式ではカレンダーと現実の乖離が次第に増えることがわかった。たとえば真夏が次第に夏至からずれていった。これは春分・秋分を基準とする 1 年の長さは約 365 と 1/4 日だが、ユリウスシーザー（そのとき Pontifex Maximus（最高神官）だった）はそれを修正するために紀元前 46 年（Macrobius によりこれは「混乱の年」とよばれている）を通常の 1 年の 1 と 1/4 倍の長さとしてしまい、紀元前 45 年からユリウス暦を始めた。

その暦では 4 年ごとに閏年があり、その年は 1 年の長さが 366 日と決められた。これで問題は解決したようにみえたが、実際は 1 年の長さは 365 と 1/4 日よりほんのちょっと短い。そのため真夏が今度は反対方向に、夏至より次第に（とはいえ以前より遥かにゆっくりとではあったが）ずれていった。そして 1582 年にローマ法王グレゴリー 13 世がグレゴリー暦を定め、それによると世紀の変わり目の年の数が 100 の倍数になる年のうち、4 回のうち 3 回を閏年でなくし、1 回だけ閏年となるようにした。すなわち年の数が 100 で割り切れて 400 で割り切れなければ閏年ではないとした。たとえば 1600 年は閏年だが、1700 年・1800 年・1900 年は閏年じゃないという具合だ。

このグレゴリー暦とユリウス暦の違いは

1700 年 February 末までは 10 日の違い

1800 年 February 末までは 11 日の違い

1900 年 February 末までは 12 日の違い

となる。

英国ではグレゴリー暦が採用されたのは 1752 年だった。その年、September 3 日木曜日を September 14 日にするという方法で、11 日分調整された。

政府の会計年は 1751 年までは Michaelmas Day (聖 Michael の日) の September 29 日に終わることになっていたが、1751-2 年の歳入が閏年のちょうど 1 年分になるように、1752 年以降は 11 日あとの October 10 日に終わることになった。

1800 年に政府は会計年をクリスマスの 11 日後すなわち January 5 日に終わると変更した。

1854 年には今度は Lady Day (March 5 日) の 11 日後、すなわち April 5 日に終わるように変更した。それは今でも所得税ベースの年の終わりの日となっている。

- (b) 教会の年はキリストの誕生日 December 25 日に始まるとされていた。それはその後聖母マリアの(受胎告知の)日、March 25 日から始まると変更された。そして民法上の、あるいは法律上の年は 1751 年以前はイギリスではその March 25 日から始まるとされていた。

しかしながらそのしばらく前から歴史上の年は January 1 日から始まるとされていた。1752 年 January 1 日から法律上の、あるいは民法上の年は歴史上の年と同じとされ、今と同じカレンダーが使われるようになった。その結果、18 世紀の前半に、聖母マリアの日 (March 25 日) の前に生まれた人は生れ年が 2 つあることになった。

コメント (15)

カレンダーについては、面白い話がたくさんあるので別途説明を用意しています。ただし、こここの所の記述に直接関係することだけ、簡単にコメントします。

まず最初にユリウスシーザーがユリウス暦を始めた紀元前 46 年・45 年のことです。

シーザーは最高神官だったので、暦を作る責任者でした。で、当時ローマはいわゆる旧暦と同様、太陰太陽暦を使っていたので、大体 3 年に 1 回くらい閏月を入れなければいけなかったのですが、初めはヨーロッパの征服のため、そのあとすぐ、当時最高権力者になるため戦争に次ぐ戦争で、それができませんでした。そのため何回か閏月を入れ損なったので、暦が大幅に狂ってしまいました。そこで太陽暦に変更するに際し、この紀元前 46 年に通常の閏月と、それ以外に特別の追加の閏月を 2 カ月分入れ、合わせて 15 カ月 445 日の 1 年とし、その翌年から太陽暦のユリウス暦を始めた・・・ということです。何とも思い切ったやり方です。

ここで 1 年の初めが March 25 日だなどという記述があります。これはどういうことかという、

1483 年 March 22 日 1483 年 March 23 日 1483 年 March 24 日

ときて、その翌日が

1484 年 March 25 日 (ここで年が変わります)

そのあと

1484 年 March 26 日 1484 年 March 27 日

ときて

1484 年 December 30 日 1484 年 December 31 日

1484 年 January 1 日 1484 年 January 2 日 (ここでは年は変わりません)

となるということです。

新しい年が March 25 日から始まるという、とてつもないやり方です。

上に書いたように、イギリスでは 1752 年の September 3 日の翌日を 14 日にするというやり方で、カレンダーを変えました。

日本でも明治の初めに、それまでの太陰太陽暦(いわゆる旧暦)を太陽暦(グレゴリー暦)に変更したことがあるんですが、その時の方法は

明治5年 12 月を2日で終わりにし

その翌日を明治6年1月1日として、あと1月2日・1月3日と続けるという方法です。途中で変えるなんてことをしないで、ちゃんと1月1日をスタートとしているわけです。

上の説明で、3月 23 日とか3月 24 日と書く代りに、March 23 日、March 24 日と書きました。

日本でも弥生(3月)とか霜月(11月)とかの言い方はありますが、正式なのは1月・2月・・・の方です。ところがヨーロッパでは便宜上、1月・2月を使いますが、正式なのは January・February・・・の方です。ですから年がどこから始まろうと構わないといえば構わないわけです。

もともと大昔のローマ時代の初めには、英語で言う March から始まって December までが1年だったようです。1年は10ヵ月で、January と February にあたる日は「月のない余分な日」ということだったようです。

しかしそれではいくら何でも不便なので、その後 January と February を追加して、December のあと、1年の終わりに置いたようです。その後 January を1年の初めとするルールはできたのですが、なかなかそのルールは一般化せず、様々な1年の始まりがあったようです。大変ですね。